

■事業報告

関西での「平成の大津波被害と博物館」巡回展

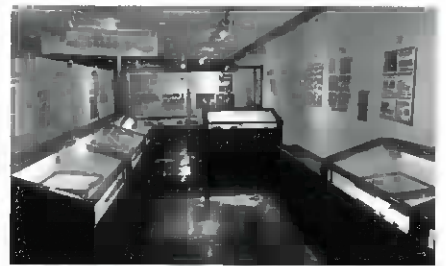
平成23年4月から始まった岩手県における文化財レスキュー活動と、救出された文化財の価値を紹介するテーマ展「平成の大津波被害と博物館」は、平成25年1月5日～3月17日に当館で開催され、その主要部分が同年5月15日～6月22日に昭和女子大学光葉博物館でも展示されました。その後、自然史標本のレスキュー活動をテーマの中心に据えて再構成したミニ巡回展が、夏から冬にかけて関西の3つの博物館等で開催されました。

当館の文化財レスキュー活動は、多くの博物館・研究機関等の協力を得て行われていますが、特に陸前高田市立博物館所蔵自然史標本の再生は、北海道から九州まで40館を超える博物館等の協力を

よって成し遂げられました（本誌130号）。これらの標本の多くが陸前高田市出身の鳥羽源藏やその後継者たちによって収集されたものであったことから、関西巡回の出発点となった大阪市立自然史博物館（8月24日～10月14日）では、副題を「ナチ・イラスト鳥羽源藏と後継者たちの残したものと、彼らが残した自然科学の成果を救出標本から示すこと」を主なテーマとしました。またあわせて、同館やNPO法人大阪自然史センターが中心となって行っている被災地の復興支援活動についても紹介されました。

続いて奈良県の橿原市昆虫館（10月22日～11月17日）と兵庫県の伊丹市昆虫館（11月21日～12月23日）でも、それぞれ新たな工夫が加えられました。

この関西巡回展では、見る方に親しみを感じていただくため、近畿地方で採集された歴史的に貴重な標本を新たに選び、展示資料に加えました。さらに各開催館の独自の工夫によって、被災資料の新たな面に光が当たったように思われます。



橿原市昆虫館での展示（佐久間大輔氏撮影）

「平成の大津波被害と博物館」展は、東京都の江戸東京博物館において新たな内容を加えて開催中です（3月23日まで）。（専門学芸員 鈴木まほろ）

■事業報告

平成25年度 岩手県文化振興事業団プレゼンツ
「文化・芸術が集うとき in 紫波町」

合同展（平成25年度岩手県立博物館移動展・第34回埋蔵文化財展）

岩手県文化振興事業団の各事業所が参加する合同事業、「文化・芸術が集うとき」。今年度は平成25年11月14日（木）から17日（日）までの4日間、紫波町で開催されました。当館は、埋蔵文化財センターとともに紫波町情報交流館の大スタジオを会場に合同展を行い、500名を超える方々にご来場いただきました。

当館では、館内展示物以外に膨大な数の資料を収蔵しています（平成25年11月現在の登録数は14万点超）。今回の合同展では、地質・考古・歴史・民俗・生物の各部門がこれら収蔵品及び県蔵品の中から紫波町に縁のあるものを中心に450点超の資料を選び、ご覧いただきました。例えば、紫波町の山王海ダム付近で見つかった新第三紀後期中新世のサケ

化石（地質部門）、東長岡天王遺跡で出土した縄文時代晩期の土偶（考古部門）、江戸時代に盛岡藩が作成した国絵図で、志和四箇村や飛び地の八戸藩領も描かれている盛岡藩領内図（歴史部門）、昭和初期に町内で製作されていた土人形（民俗部門）、1979年に町内で保護された、本来は太平洋・大西洋・インド洋の熱帯・亜熱帯海域に分布するはずのシラオネツタイチョウ（生物部門）などです。

この他、15日（金）には当館主任専門学芸員の羽柴直人が「比爪の考古学的研究」と題し学芸員講座を行いました。町内には奥州藤原氏の時代（12世紀）の遺跡が数多くあり、当時の一大拠点が発見されたと推定されています。最新の研究成果を交えたこの講座には、39名の方にこ

参加いただきました。

年に一度、博物館・埋蔵文化財センター・県民会館・美術館が盛岡を飛び出して出張事業を行うこの企画、広い県土を有する岩手ではとくに意義のあることと考えています。より多くの県民の皆様へ、より身近で文化・芸術に親しんでいただけるよう、今後も努力してまいります。



（専門学芸員 丸山浩治）